

ワークショップ  
アイデンティティ・トラブル——「人種」／エスニシティの混淆と日本社会  
2013年2月3日(日) 一橋大学  
報告要旨

●報告1

映像表象における沖縄の「アメラジアン」

野入直美  
琉球大学

本報告では、アメラジアンがメディア表象の中でスティグマ化される客体であることを脱し、表象のイニシアティブを取り戻そうとする試みについて、アメラジアンスクール・イン・オキナワの中学生たちが制作したドラマ“Doubles World”を用いて考察する。そのドラマは、マイノリティの子どもたちが体験してきた同化圧力の暴力性をリアルに描き出す一方で、ジェンダー化されたファンタジーによって牽引されている。マイノリティが表象におけるイニシアティブを回復するプロセスが、複数の権力関係をはらんだ複雑な相互行為であることが見いだせる。

1. 映像表象とマイノリティ
2. 沖縄のアメラジアン
3. 筑紫哲也ニュース23における「アメラジアン」の表象
4. お笑い米軍基地における「ハーフ」「アメじょ」の表象
5. ダブルズワールド—同化圧力とジェンダー・ファンタジーの錯綜

\*本報告は、琉球大学国際沖縄研究所共同研究プロジェクト「沖縄ジェンダー学の創出」の研究成果の一環として行います。

●報告2

沖縄のインヴィジブル・マイノリティー  
—フィリピン・ウチナーンチュ二世の事例—

ジョハンナ・ズルエタ  
日本学術振興会外国人特別研究員・一橋大学

「フィリピン・ウチナーンチュ」二世というエスニック・カテゴリーは、フィリピン人と沖縄出身者の親を持つ人々を指し、戦前と戦後の沖縄—フィリピン間移動のなかで作られたエスニック・アイデンティティである。そのなかでも、本報告が注目するのは、沖縄で終戦直後に生まれた「フィリピン・ウチナーンチュ」二世であり、彼ら／彼女らの沖縄での存在と現状を明らかにする。

終戦直後の沖縄では、米軍基地建設のため、軍事・軍属として、フィリピン人が雇われた。彼らのなかには、沖縄人女性と出会い、結婚・同棲したケースが多かった。こうしてフィリピン人男性と沖縄人女性間に生まれた「フィリピン・ウチナーンチュ」二世のほとんどは、現在、沖縄に居住し、米軍基地に勤めている。彼ら／彼女らは、法的に「日本人」（日本国籍を持つ）だが、「ハーフ」・「ハーフ・オキナワン」という自己カテゴリーを用い、沖縄アイデンティティを主張する傾向が見られる。この沖縄アイデンティティの主張、また「ハーフ」という自己カテゴリーには、エスニシティ、人種 (race)、国籍が関わっており、本報告では、「フィリピン・ウチナーンチュ」二世を事例にして、この三つの概念の交差点を論じる。また、このことを通じて、「日本人」というカテゴリーの中のマイノリティを考察し、「日本人」と「ハーフ」、それぞれのバウンダリー・メイキング (boundary making) についても論じたい。

●報告3

向老期をむかえた「ハーフ」のライフストーリー  
—エリザベス・サンダース・ホームの事例から—

田口ローレンス吉孝  
一橋大学 修士課程

本報告では、エスニシティ/マイノリティ研究において不可視化されてきた「混血児」「ハーフ」「アメラジアン」と呼ばれる人々の個別具体的な状況を明らかにしながら、「人種」や「エスニシティ」による<大きな物語>に回収されない物語について明らかにする。調査対象はエリザベス・サンダース・ホームの卒業生であり向老期(50代-60代)をむかえる「孤児/施設出身」の「ハーフ」である。向老期において①家族とのかかわり②対社会的関係において自己の経験をどのように再帰的に認識しているかを見ていった。集合的なアイデンティティを「人種」や「エスニシティ」ではなく<家族としての施設(ホーム)>に求めている語りや、否定的な社会関係の中で関係性を調整する様々な営為も見られた。語られたストーリーは、既存のマイノリティ研究には見られない<新たな物語>であり、それが分類カテゴリーとして定着した「エスニシティ」や「人種」概念になんらかの影響を及ぼす可能性も見えた。

●報告4

「日本社会における人種化と可視性」  
—日本人とフィリピン人の親をもつ子供の経験—

フレデリック・ルスタン  
一橋大学外国人客員研究員

1970年代後半に始まった移住の流れの結果、2000年代以降、フィリピン人が日本の外国人人口の約10%を占め、フィリピン人女性は日本人と結婚した外国籍として第二位の集団となっている。1995年以来、日本では、日本人とフィリピン人夫婦の間のおよそ8万人生まれ、また、この30年間で両国では約30万人が生まれたと推定される。現在、最も上の世代の子どもたちは既に成人している。こうした子どもたちの母親はマス・メディアの表象によってスティグマ化され、日本社会への統合の道のりの複雑さを覆い隠されてきた。その結果、現代日本社会における日比カップル間の子どもたちの状況は一体どのようになったのだろうか。本報告は、このようなこどもの例をみながら、共通するすべてのミックスルーツの人々、あるいは特定のフィリピン・ルーツの人々に関するアイデンティティの要求およびアイデンティティの割り当ての問題に焦点を当て、分類化、人種化、可視性、エキゾチック化および文化変容の問題を議論する。

●報告 5

在日朝鮮人＝日本人間「ダブル」の民族経験  
—加害／被害性をめぐる語りに着目して—

李洪章

日本学術振興会特別研究員 PD

本報告では、在日朝鮮人と日本人のあいだに生まれたいわゆる「ダブル」が日常生活の各場面において、在日朝鮮人からは「不純なる者」として、日本社会からは「異質なる者」として排除・周縁化されるような状況をどのように経験し、またそれに対処しているのかを明らかにする。「ダブル」の存在は、純血主義のもとでは同化の象徴として位置付けられるいっぽうで、純血主義を批判する政治的構築主義のもとでは個人主義の象徴としてそのハイブリディティが無批判に賞揚される傾向にある。報告者はその双方を批判したうえで、「ダブル」の民族経験のあり方を読み解くことで当事者によって民族概念がどのように用いられているかを明らかにし、さらにはかれ／かのじよらの多様な民族経験を結ぶような共同性としての「民族」はいかにすれば成立可能かを検討している。本報告では「ダブル」による民族経験に関する語りのうち、加害性と被害性をめぐるものに着目し、在日朝鮮人の被害性が強く意識されるような場面で、「ダブル」としての立場性が加害と被害の「大きな物語」の文脈に回収されてしまうことに対して、加害と被害の二分法を拒否しつつ、歴史における主体性を確立しようとする姿を描き出すことを試みる。